

武祐一郎先生はそのお話の中に、沢山のたとえ話や具体例を盛り込んでいました。学園在学中に関藤館を会場に開かれていた聖書集会や、卒業してから通った町田聖書集会などで聴いた中で特に印象に残っているたとえがあります。それは、「キリストを信じ従って歩むということは、世間の多くの人たちが乗っている電車とは、正反対のガラガラの電車に乗ることです」というものです。

いま私は牧師として仙台に遣わされています。そこに至るまで、何度も武先生に励ましをいただきました。そこで、私は月曜日から土曜日までは被災者支援センター・エマオのコーディネーターとして、日曜日はいずみ愛泉教会という教会の副牧師として働いています。

5年3ヶ月経った今も160,081人もの方が元住んでいた場所を離れ、避難生活を余儀なくされています。放射能汚染は子どもたちの命を確実に傷つけ続けています。折角生き延びて仮設から移っていった復興住宅で孤立死する方もいます。私も被災地で何人もの方の葬儀に出席しました。でも、同時に皆さん精一杯歩みつつ、たくましく歩まれている方も沢山います。お手伝いしようと仮設住宅や津波被災農家を訪問したら、逆に励まされ命の素晴らしさ美しさに出会わされています。

地震・津波・東京電力福島第一原子力発電所という痛みの中で、悲しみの中で、目を背けたくない現実の中で、生きて働かされているイエスと出会うのです。

今、日本社会は大きな転換点を迎えています。東日本大震災などなかったかのように、原発が再稼働され、東京オリンピックへと進んでいます。戦前といってもいい政治状況が着々と出来上がってきています。

武先生と出会った私たちは、ここで社会とは反対方向へと進む、始発電車のようにガラガラの電車にはたして乗ることが出来るでしょうか。

イエスの生き様を振り返った時に、またイエスに従った人たちのバラエティ、多様性を見る時に、何も英雄になれる人だけが乗る電車でもないことに気付かれます。イエスに共鳴し、共に神の国が来ることを信じ歩いていった人たち。それはそれぞれの弱さを認め合い、補い合う、強さと強さではなく、弱さと弱さを絆とする歩みでした。大きさではなく小ささ。豊かさではなく貧しさ。差別する側ではなく差別される側。抑圧する側ではなく抑圧され小さくされている人たちと共に生きる歩みでした。その歩みの中に、武先生も加わっておられました。だからこそ、己の限界、弱さ、土の器であることを、武先生もいつも自覚されていました。しかしそのような自分たちを、神さまは活かし、その神さまの光を浴びることによって私たちは、あたかも「光半導体」のように、愛の業に押し出されていくということを武先生は信じていました。決して強さではなかった。弱さと矛盾です。そのことを胸に刻みたいと思うのです。

世間の多くの人たちが乗る電車とは、反対に進むガラガラの電車に乗ることを選ぶ勇気を、神さまは私たち一人一人に与えて下さると信じ、ここからそれぞれの場へと向かいましょう。